

風俗畫報

東京：東陽堂，1889—1916

『繪本女中風俗艶鏡』（1732年刊）、『近世女風俗考』（1835年刊）、『諸國風俗問状』（1815年頃刊）等にみるように、書名に風俗の語のある著作物は、すでに江戸時代にも存在していた。一方で、西欧では19世紀中頃からグラフィック（Graphic）やイラストレイティド・マガジン（Illustrated magazine）の刊行が盛んになり、「イラストレイティド・ロンドン・ニューズ（The Illustrated London news）」の特派員として、幕末維新期、横浜に滞在していたイギリスのジャーナリスト、ワーグマン（C. Wirgman）も「ジャパン・パンチ（The Japan punch）」（1862—1887）を発行した。このような時風の影響を受けて、1889（明治22）年2月に東陽堂より四六倍判の石版画による月刊グラフィック雑誌「風俗畫報」が創刊され、「日本美術畫報」（1894年刊）、「世事畫報」（1898年刊）、「東洋畫報」（1903年刊）、「婦人畫報」（1905年刊）等がこれに続いた。「風俗畫報」が1916（大正5）年3月に最終号を刊行するまで、27年間の総冊数は、通巻478号に特集号のうち号数の入っていない増刊39冊を加えて517冊を数えた。

創刊の年には、大日本帝国憲法が發布され、鹿鳴館は閉鎖されて欧化の風潮が陰りをみせていた。そのような折、創刊号の「論説」には、発行の主意として、幕末以来の世相の目まぐるしい変化を消し去ることのないように「畫報により其形を印象し、其聲を文章にするととき……現今將來共に歴史學藝上に益すること決して鮮少にあらざるを信ず」とある。また、同号の「稟告」には、「風俗畫報ハ専ラ繪ヲ應用シテ……眼前ニ見ル所ノ風俗ヲ網羅集載シ以テ後世ニ傳ヘ歴史工藝其他諸科ノ考證及研究ノ用ニ供セントス」と、編集の意図を伝えている。そこで、掲載内容は、(1) 江戸時代までの風俗の考証 (2) 東京新風俗の記録 (3) 全国地方風俗の紹介と3大別され、通常号300余冊と特集号200余冊が刊行された。通常号の各目次項目は、「論説」「人事門」「言語門」「服飾門」「飲食門」「土木門」「器財門」「動植物門」「遊芸門」「流行門（1896年刊 116号初見）」「叢談（物語の意）」「漫録（隨筆の意）」「詞林（詩歌の意）」「社告」「広告」などと区分され、各記事や作品には、執筆者や画家が明記されている。特集号では、博覧会・祝典・災害・戦争の詳細を報じ、そのほかには、1896（明治29）年9月から1911（明治44）年10月までの16年間にわたる「新撰東京名所圖會」64冊・「東京近郊名所圖會」17冊が、質量両面において光彩を放っている。また、1901（明治34）年刊行の「郵船圖會」・1905（明治38）年刊行の「英國艦隊歡迎圖會」・1908（明治41）年刊行の「米艦歡迎紀念號」も、報道画家の筆力が時勢を克明に描き伝えていて興味深い。

東陽堂を創設した吾妻健三郎（1856—1913）は、米沢藩士の家に生まれ、大学南校（東京大学の前身の一）で物理・化学を講義していたドイツのワグネル（G. Wagner）に師事して銅版印刷を学び、1876（明治9）年、日本橋葺屋町に印刷・出版業を開業した。当時、印刷法は、木版・銅版から石版への転機を迎えていた。社屋は、「風俗畫報」創刊後の1895（明治28）年11月に神田に移転した。1899（明治32）年8月刊行の「新撰東京名所圖會」神田区之部には、山下重民文・山本松谷画による「東陽堂本店」の記事が掲載されていて、広大な敷地に吾妻邸と併設された当時の情景をうかがい知



図1 1889(明治22)年2月刊 創刊号表紙
明治・江戸の男女を描く

ることができる。

社主吾妻を支えた執筆者のうち、1887(明治20)年に『維新史料』を編輯し、衆議院議員となって政界で活躍した野口勝一(1848-1905)は、北嶽あるいは珂北と号して創刊号から論説を多く担当し、大蔵省に勤務の傍ら「新撰東京名所圖會」等を手掛けた。山下重民(1857-1942)は、第2号から第473号まで実地調査と執筆寄稿をし続けた。吾妻と同郷米沢出身の渡部乙羽(別名高橋又太郎 1869-1901)も、文才・画才を認められて活躍したが、1894(明治27)年に博文館に移った。その年、山本松谷(1870-1965)は、郷里の田植行事に取材した「土佐国の早乙女図」を投稿して絵画部に採用され、本誌の全盛期を彩る表紙絵や口絵、その他多数を描き、特に山下重民の原稿に絵筆を振るい続けた。

創刊号の表紙には、中央の縦長方形白抜きに書名を掲げ、その周辺後方に江戸風、前方に明治を象徴する男女の姿絵が配され(図1)、それは45号まで続いた。表紙絵は、その後、時好や時運を描いて毎号変化した。そのうち、50号からは、「FUZOKU GAHO (The Pictorial, Magazine, of, Japanese, Fashion.)」と英字入りとなり、間もなく、「FUZOKU GAHO An Illustrated Magazine of Japanese Life.」と改められて、毎号ではないものの、1896(明治29)年まで存続したのも興味深い。

時勢を描写した多数の記事のなかで、国営事業が日本人の生活を一変させたと思わせる事例のひとつとして、52・57・58・62号掲載の郵便電信局の図解が注目される。いずれも見開きのモノクロページで、前3図は、洋館の局内で制服を着た大勢の局員が効率よく分業する光景であり、62号に限



図2 1906(明治39)年3月刊 332号表紙
日本再見の時風を描く

っては、駅のホームを行き交う乗客と神戸行きの客車の一部に郵便物の搭載室が設けられていて、「鉄道郵便掛員」が仕分けなどの執務をする様子が細やかに描かれている。また、特集号の記事例として前述した「郵船圖會」は、239号に全52ページ(通常号の約2倍)にわたって、日本郵船が所有する春日丸の船旅を克明に報じている。そこには、シャンデリアを吊るし絨緞を敷き詰めた食堂前の廊下集い、あるいは、そこに続く螺旋階段を昇降する盛装した国内外の紳士淑女や子供たちの姿もあり、また船内の談話室・理髪室・浴室の描写にも近代日本の豪華客船の旅が伝えられている。

明治30年代(1897-1906)には、西洋絶賛後の日本再見の風潮・洋と融合した和の姿あるいは日本に根付いた西洋の文化が浮彫りにされた。母娘・姉妹・少女・幼女たちの髪に飾ったりボンや造花・着物や半襟の図柄・襟止や指輪等々に

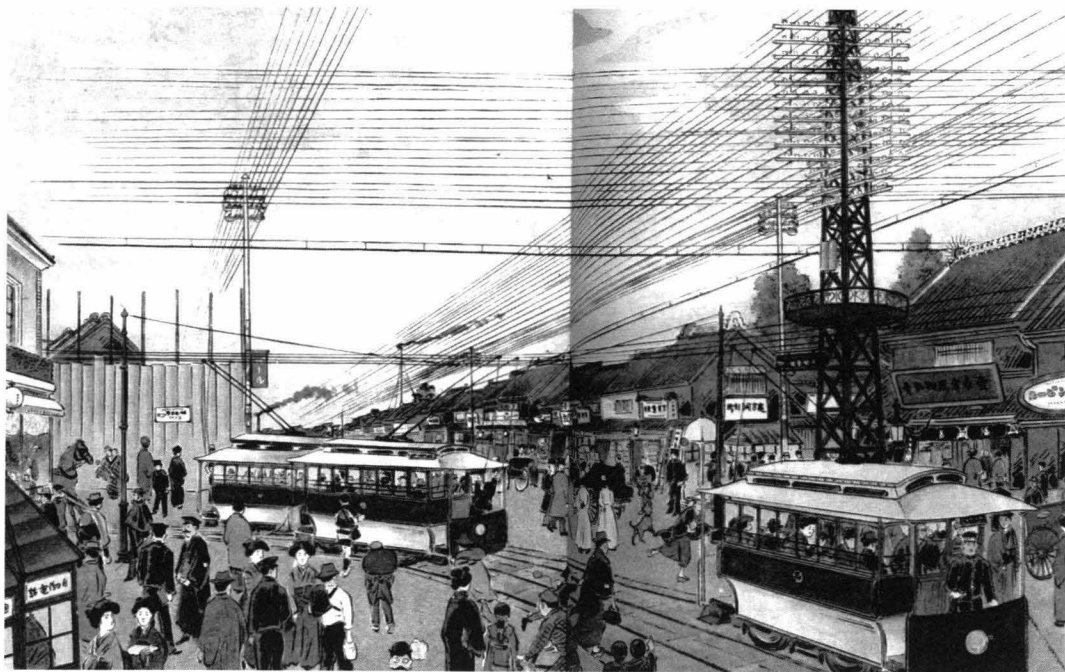


図3 1907（明治40）年10月刊 373号口絵 「新撰東京名所圖會」本郷3丁目および同4丁目の図

細やかな視線を注いだ山本松谷の表紙絵や口絵も、本誌全盛期の精彩を極めている。そのような時風は、市松文・鱗文に富士山と宝船を配した332号の表紙にも顕著であり、創刊号と比較して国力の充実が実感される（図2）。

1907（明治40）年刊行の「新撰東京名所圖會」には、本郷区が特集されている。そのなかで笠井鳳齋画の口絵には、交差する無数の電線の下で、建設現場の板張り・電話ボックス・キリンビール等の看板を掲げた店の家並に囲まれて、路面電車も白衣のナースも往き来する誰も彼もが実にせわしなく動き回っている。そこには、その年、福岡から上京したばかりの漱石の作中人物、三四郎が不安と不快にさいなまれた都会の喧騒があった（図3）。

1914（大正3）年に至って初めて、ソフト帽にビジネススーツスタイルの男性が単独で表紙を飾った（図4）。しかし、20世紀に入り、石版画から写真版への移行は次第に本誌を衰退に導くことになり、グラフ雑誌の担い手は、1922（大正11）年創刊の「週刊朝日」「サンデー毎日」、翌年の「アサヒグラフ」へと引き継がれていった。（佐藤泰子）



図4 1914（大正3）年6月刊 458号表紙 単独の男性が初めて表紙を飾る